ゼミの談話の接続表現

学籍番号　S15（漢字表記）
所属・学年

1. はじめに

私たちが普段話すとき、接続表現は重要な役割を果たす。「では」、「それでは」のように、議論を始めるときに用いられ、また、文章の区切りとなり、論理構造の理解を助ける役割も果たす。そのため、接続表現をテーマに様々な研究が行われている。その一つの例として講義での接続表現をあげられる。石黒(2010)は講義での接続表現には、様々な種類があり、その機能の一つとして講義の重要情報を表示する機能を持つと指摘する。このように研究の仕方の中でも、各場面での接続表現の機能について研究が行われている。例の場合、講義で使われる接続表現の研究だった。この論文では、よりニッチなところにターゲットを絞って留学生のゼミの談話においての接続表現を研究したい。

では、なぜ留学生が研究対象で、この研究がどういう意義をもつのか。日本の大学の場合、ゼミに所属し、そこで発表や議論をすることが多い。しかし、留学生の多くが自分の意見を明確に伝えられず、苦労しているのが現状だ。接続表現は、意見を述べる際、重要な機能をもつために、留学生の接続表現の使用状況を分析することによって留学生の日本語学習を助けることにつながると思われる。

2. 先行研究と本研究の位置付け

ゼミの談話における接続表現については、あまり研究がなされていない。関連性のある研究として、講義の談話の接続表現がある。その先行研究としては、石黒圭の「講義の談話の接続表現」と、伊能裕晃の「講義理解の手がかりとしての接続表現 -受講ノートの分析による-」がある。

まず、「講義の談話の接続表現」では、講義での接続表現の使用状況を分析し、使用された接続表現がどういう機能をもつかについて書かれている。使用状況においては、11 の講義資料から分析した結果、総分数に対する接続表現の出現頻度は 36.9%であった。そして、講義の接続表現は、講義の構造を表示する機能、講義の重要情報を表示する機能があるという。例えば、「つまり」の場合は

重要情報を表示する接続表現として機能することが多く、先行文脈の要約が、「つまり」の次に叙述されるという。
一方、「講義理解の手がかりとしての接続表現 -受講ノートの分析による-」のでは、講義の接続表現の重要情報表示機能に焦点をあて、重要内容の手がかりとなる接続表現を特定し、それをさらに分析している。分析の結果、「じゃ、じゃあ」、「つまり」、「だから」、「それから」、「実は」の５種の接続表現が重要情報の手がかりとなる接続表現であり、同じ表現でも使う場所によって重要な役割を果たすものもあれば、そうでないものがあることを明らかにした。
この二つの研究を踏まえ、講義ではなく、ゼミの談話という新しい分野の研究を行う。日常会話ではなく、一人で話す講義ともまた異なるゼミという談話は、今まであまり研究が進んでいないことから、学術的価値が十分あると言えるだろう。

3. 研究の資料と分析の方法

研究の資料は、（大学名）大学（研究科名）研究家の某ゼミの２回分のスクリプトを利用する。
このデータをもとに、「講義の談話の接続表現」の分析方法を倣い、どの接続表現が何回使われたのかを数え、市川(1978:89-93)の接続表現分類法を用いて分類する。これによって、どのタイプの接続表現が何回の頻度で使われたのかが明確になる。つまり、ゼミの談話の定量的分析を行う。
そして、その接続表現がどういう機能をするかについて分析する。石黒(2010)の「談話構成機能」や「重要情報予告機能」以外に他の機能で使われるものがあれば、新たな機能の一つとして命名する。

4. 分析結果

二つの講義の接続表現の使用頻度を分析した結果が表１である。一番よく使われる接続表現は「けど/けれども」で３３回だった。一方、講義で最もよく使われた「で」は９回で２位ではあるが、一位とは大きな差がある。
類型別にみると、逆接型が４５回で最も多く、添付型(14 回)、順接型(12 回)、同列型（８回）の順になる。
しかし、これらの接続表現がどういう機能を持つかを分析するときに、出現頻度が多いからといって必ずしも重要な意味を持つ機能をするわけではない。む

しろ、石黒の(2010:148)講義の談話の分析のように、出現頻度が極端に多くないものが、重要情報を予告してくれることが多い。それは、直感的に考えても当たり前のことである。論理の核心となる話だけしてしまうとむしろ理解しにくい。例をあげたり、補足説明をするなど、聞き手の理解を助ける内容が必要なのである。
例えば、絵本があまり教育に向いてないことを主張するとき、その主張の理解を助けるために、成人の学習者が絵本に抵抗を示すという例をあげている場面が見られる。
一方、ゼミでも、講義と同じく、始まりと終わりがあるわけで、その談話構成機能、談話を開始、または、終了させる機能の接続表現が使われていることがわかる。このように、一人が長く話す場合の講義と、二人以上の対話の形式で行われるゼミの間に、接続表現の機能の面で共通点が見られる。
では、ゼミだけの独特な特徴は何があるのだろうか。このデータから見られるゼミの特徴の一つは同じ接続表現が、韻律を合わせるように文末、あるいは文頭に連続で使われていることだ。

今の議論を聞いていて思ったんです**けど**⑨！、日本語学習者っていうのと、韓国語学習者っていうのと、それから、絵本の難易度調査。こういう言葉がこの論文の流れをわかりにくくしているポイントだと思うんですね⑭！。今も議論されていたんです**けど**⑨！、たとえば⑦、たとえばです**けど**⑩、すごく複雑なことを整理してしまいます**けど**、

ここでみるように、口癖のように文末に「けど」を何回も繰り返して使っていることがわかる。他の種類の談話でも見られないとは言えないが、ゼミではこの現象がよく見られる。

表1:接続表現の類型と使用頻度

類型	接続表現	頻度
逆接型	けど/けれども	33
逆接型	が	3
逆接型	ところで	2
逆接型	でも	7

順接型	ということで	1
順接型	そうすると	1
順接型	ですから	1
順接型	で	9
添付型	あとは	5
転換型	じゃあ	1
添加型	それから	2
転換型	それでは	1
添付型	まず	3
添付型	それで	2
添付型	また	4
同列型	つまり	1
同列型	例えば	7
補足型	というのは	3

参考文献

石黒圭(2010) 「第７章 講義の談話の接続表現」佐久間編著(2010) pp.138-152
伊能裕晃(2012)「講義理解の手がかりとしての接続表現 -受講ノートの分析による-」『早稲田日本語研究』21、早稲田大学日本語学会